

乳牛の飼料用イタリアンライグラスの収穫を開始

イタリアンライグラスは、冬作粗飼料（秋に播種、春に収穫）として広く栽培されており、強健で耐湿性が高い一年生の牧草です。

当センターでは、約 800 アールのほ場（12 か所）で、生育速度が異なる複数の品種を栽培しており、それぞれの生育適期に合わせて4月から5月にかけて刈り取っています。

昨年 10 月の長雨の影響で播種が遅れましたが、今年3月と4月の平均気温が平年比で約 2℃高かったため、平年と同時期の刈り取りができ、収量も平年並みの 90 t を見込んでいます。刈取り後はラ

ップサイレージとして貯蔵し、飼養している 50 頭の乳牛に良質な粗飼料として、1 年間給与していきます。



刈り取った牧草の成



サイレージを屋外で貯蔵



牧草を白いフィルムでラッピング

畜産センター

牛群検定成績^{※1}を活用した勉強会の実施

府内酪農家 62 戸のうち、比較的飼養頭数の多い酪農家 25 戸は、毎月個体毎の乳量、乳質検査及び繁殖成績をとりまとめた牛群検定を実施しています。

当センターでは、家畜保健衛生所と連携して検定成績をもとに個別に勉強会を行っています。

今回、丹後管内の酪農家を巡回し、牛群検定成績から分娩後の乳脂率が高く、脂肪肝の傾向やエネルギー不足の状態が見られたため、粗飼料^{※2}の増給や分娩後の濃厚飼料^{※2}の増給方法について説明しました。

また、分娩後にカルシウム不足で起立できなくなり治療した牛がいたため、家畜保健衛生所からは、ビタミン剤やカルシウム剤の給与方法について指導しまし

た。

酪農家からは、「普段、牛群検定成績をじっくり見ていなかったのが、説明を聞いて勉強になった」と喜ばれました。今後も引き続き飼養技術向上に向けた指導を行っていきます。

※1 牛群検定成績：酪農家が飼養している牛の乳量や乳質、繁殖成績を毎月まとめたもの。乳牛の健康管理や遺伝的改良の手助けになり、酪農経営に役に立つ牛群情報。

※2 粗飼料と濃厚飼料：粗飼料は草からつくられたエネルギー源となるエサ。濃厚飼料はトウモロコシや豆類などタンパク質などの栄養分が多く含まれるエサ。

畜産センター

研究成果を活かした養鶏農家指導を開始

当センターでは、これまでに大型鶏舎におけるワクモ※の習性を利用したトラップ（捕獲器）の開発（昨年末、特許出願）や、ネズミの侵入経路の解明と防除方法などの研究を行っており、研究で得られた成果をいち早く府内の養鶏農家の経営改善に役立てるため、家畜保健衛生所と連携して農家指導を行っています。

今回は、2戸の中規模養鶏農家を対象に、ワクモの発生状況やネズミの痕跡等の現地調査を行い、研究で得られた成果を元に対策を実施しています。

今後も研究成果を速やかに普及できるよう、継続的に技術普及活動をしていき

ます。

※ワクモ：鶏に寄生する吸血ダニで、鶏の貧血や産卵低下など経済的な損失を招く。



ワクモトラップの設置



ネズミ対策のための現地調査

畜産センター

待望の春、牛やヤギたちが放牧場へ

碓高原も待ちかねた春を迎え、畜舎で冬を過ごした家畜の放牧が始まり、4月5日には35頭の牛がそれぞれ3箇所放牧場へと向かいました。

また、冬期に閉鎖していたヤギやヒツジとふれあうことができる「ふれあい広場」を4月19日に再開し、母ヤギ12頭、母ヒツジ4頭とその子供たちが、地元の園児たちに引かれ、畜舎から「ふれあい広場」まで引っ越ししました。

牛やヤギたちは、暖かい春の日差しの中、放牧場で伸び伸びと元気に過ごし、出産や繁殖の準備を進めます。

放牧は11月下旬まで続き、家畜とのふれあい等観光スポットとして多くの方々で賑わいます。



放牧場で春の草を食む牛たち



ふれあい広場でヤギと遊ぶ園児

畜産センター碓高原牧場

今年度の新たな乳用育成牛を導入

碓高原牧場では、毎年府内酪農家から2～7 か月齢及び10～14 か月齢の乳用育成雌牛を購入し、能力の高い和牛の受精卵移植により受胎させ、分娩2か月前に酪農家に譲渡する事業を行っています。

今年度も4月23日から酪農家11戸の育成牛25頭を当場に搬入しました。

育成牛は、放牧することで足腰が鍛えられ、酪農家からは「丈夫で長期にわたって子牛を産んでくれ、乳を搾ることができる」と高く評価してもらっています。

また、酪農家で生まれた和牛子牛は、

和牛繁殖農家に引き取られ、府内産優良肉用子牛の増頭にもつながっています。



到着した子牛を牛舎へ誘導

畜産センター碓高原牧場